

教育ヴィジョン研究センターの企画・運営戦略に関する研究（1）

研究代表者 草原 和博（社会認識教育学講座）
研究分担者 木下 博義（教職開発講座）
松宮奈賀子（初等カリキュラム開発講座）
川合 紀宗（特別支援教育学講座）
三好 美織（自然システム教育学講座）
影山 和也（数学教育学講座）
棚橋 健治（社会認識教育学講座）
山元 隆春（国語文化教育学講座）
間瀬 茂夫（国語文化教育学講座）
兼重 昇（英語教育学講座）
永田 良太（日本語教育学講座）
岩田昌太郎（健康スポーツ科学講座）
井戸川 豊（造形芸術教育学講座）
吉田 成章（教育学講座）
森田 愛子（心理学講座）

I 研究の背景と目的

本研究は、インキュベーションセンターとして申請予定の「教育ヴィジョン研究センター」の準備を行うとともに、それを持続的発展させ、自立ステージに移行させるための戦略を研究することを目的とする。

本研究の立ち上げにあたって、研究担当者らは過去3か年に渡って「Curriculum Research & Development Center」の実現可能性を調査・研究してきた。また平成27年度には「ヴィジョンと戦略ワーキンググループ教育学研究科シンクタンク構想サブワーキンググループ」によって、本センターの設立が答申された。

そこで、一連の検討結果をカタチにするため、第1年次の研究として、教育学・心理学・教科教育学等のユニットが連携し、組織的に社会貢献していくためのシステムを検討し、インキュベーションセンターの戦略づくりを行いたい。

（草原和博*）

II 研究の経過と実績

上の目的を達成するために、2016年8月3日、9月6日、10月3日、11月15日、12月12日、1月16日、2月27日の計7回の研究会を開催した。その結果、以下大きく3点の成果を得ることができた。

第1に、「教育ヴィジョンセンター」を機能させる具体的なプランの構築である。これは単に企画を立てるのみならず、将来的に予算を確保するための科研申請に結実した。本稿のⅢで述べるように、「IBのカリキュラム・授業・評価の開発的研究」「うまい教師を捉える視点についての考察―学習作業空間論の構想―」「教科教育担当の教師教育者のアイデンティティとプロフェッショナルリズムの国際比較研究」の3件を構想するに至った。

これらは、21世紀に求められる資質・能力を育成する「カリキュラム」の開発、教師や授業を総合的に捉える「研究方法論」の開発、ならびに教師・教師教育者の「専門性開発」プログラムの開発を通して、社会に貢献することを意図したものである。

第2に、「教育ビジョンセンター」を機能させるプランの一部試行である。初年度は「IBのカリキュラム・授業・評価の開発的研究」の一環として、広島県教育委員会の学びの変革推進課と連携し、グローバルリーダー校のIBカリキュラムづくりを支援する研究会を開催した。主に教育課程の全体像、理科、歴史科、国語科の4点に焦点化して意見交換を行うことができた。

第3に、「教育ビジョンセンター」を機能させる具体的な戦略の提言である。上述のプラン構築や試行を通して、研究協力者は各自の専門性と関連づけて、教育ビジョンセンターが取り組むべき活動例を構想することができた。活動例は、本稿のIVに集約して紹介する。

(草原和博*)

Ⅲ 研究構想の具体例

1. 企画1「IBのカリキュラム・授業・評価の開発的研究」

(1) 背景・目的・意義

20世紀後半頃から政治・経済・情報・環境など様々な面でボーダレス化が進む状況の中で、学校の教員には、グローバル化が進展する社会で活躍できる人材を育てるような教育ができる資質・能力を身につけることが求められている。近年、日本における普及・拡大を図ってIBディプロマ・プログラムの一部科目が日本語でも可能になり、その普及・拡大が期待されている。IBプログラムの特徴である多様性への寛容、自律的判断等を中心に据えた新しい教育のあり方の理論的検討と共に、多くの学校で導入を可能とするためにモデルカリキュラム・授業の開発・蓄積・共有が喫緊の課題となっている。

グローバルに活躍できる人材の資質・能力は、日本ではまだ一部に過ぎないIB認定校やスーパー・グローバル・ハイスクールの生徒にだけ求められるようなものではなく、それ以外の圧倒的多数の学校の生徒達にも一様に求めるべき資質・能力であり、それは新学習指導要領が求める人材育成を具体化することにも寄与する。本研究は、グローバル人材育成の牽引役となるIB認定校やスーパー・グローバル・ハイスクールのみならず、それらを含むすべての日本の学校教育をグローバル社会で活躍できる資質・能力の育成に対応したものへと改善することを図るものである。

本研究が成果を上げた場合、日本における初等中等教育の改革に極めて大きなインパクトを与えることが期待できる。IB教育の特色である多様性の認識とそれを受け入れる寛容性、自律的な判断、発信力の育成とそれを可能にする学習者主体で参加型、協働的な学習は、長年議論されながら、充分実現していなかった探究的授業が可能になり、日本の学校の根本的変革につながるという卓越した成果を期待できる。

(2) 研究内容

IBディプロマ・プログラムおよび日本国内のIB認定校において実施されているカリキュラム・授業を調査・収集・分析し、そこから得られたIBの特徴を活かした各科目のモデルカリキュラム・授業の開発に着手した。具体的には、

- ① IBプログラムの理論および実践に関する諸報告等を収集・分析し、そこにおいて育成する資質・能力とその論理ならびにカリキュラム・授業のあり方を明らかにした。
- ② 日本国内のIB認定校において実施されているカリキュラム・授業を調査・収集し、それらの特徴と課題を分析した。
- ③ これらの成果に基づいて、日本の学校で使用可能な各科目のモデルカリキュラム・授業の開発に着手した。
- ④ 新たに設置予定の県立高校でIB導入を検討中の広島県教育委員会の準備作業と連携し、各教科のIBカリキュラム・授業について相互に情報ならびに意見の交換をすることによって、研究を深めた。

(棚橋健治*・井戸川豊・兼重 昇・木下博義・間瀬茂夫・三好美織・山元隆春)

2. 企画2「うまい教師を捉える視点についての考察―「学習作業空間論」の構想―」

(1) 研究の背景と目的

本プロジェクトは、授業がうまい教師、熟達している教師、見本となるべき教師というような教師の姿を具体的にはどのように捉えたらよいかに関心をもって進められてきた。そこで、個々の教師のもつ技術をみるというよりもむしろ、これらの教師のいる空間としての教室に注目した。そこで、本プロジェクトの目的は、うまい教師によって学習の起こる教室を捉えるための視点を導き、汎用性のある理論整備を図ることである。

(2) 理論検討：学習作業空間への注目

うまい教師について、特徴的な指導技術や方法に求めるかわりに、教室で子どもたちの学習を引き起こしているかどうかという結果の側からみていくこととした。そして、学習が起きているとは、教科教育で目標とされている内容そのものを子どもたちが作り出している状態を指すこととした。特に、算数・数学科を想定した場合、子ども個々あるいはグループによって何らかの問題に取り組むことによって、それらの内容に触れることになる。それ故、うまい教師として重要なことは、物理的な教室環境の整備はもちろんのこと、子どもたちが問題と向き合えるように教室を仕立てていかなければならない。このような教室を「学習作業空間」と呼ぶこととして、次のように規定することとした：教師と子どもが、効果的に問題に取り組めるように組織された空間。

教室を学習作業空間にするためには、教師は、整備された問題の提示だけではなく、談話のテーマ（何について話しているのか）、表現の作り方、使われ方（表現に関わる規則を意識すること）、概念の具体化（コミュニケーションするためのメタファー的理解を推奨すること）に配慮しなければならない。うまい教師は、子どもたちの状態に応じてこれらの諸点から柔軟に対処していると考えられる。

(3) 今後の課題

教室は本来、教師や子どもたちの様々の思惑や意図が交流する場所である。本プロジェクトで構想している学習作業空間はこれらの交流によって仮想的につくりだされるものである。そのため、何がこの空間の構成に貢献しうるのかを実証的に導くための方法論の開発は、今後第一に取り組まねばならない課題である。

(影山和也*・川合紀宗・永田良太・森田愛子・松宮奈賀子)

3. 企画3「教科教育担当の教師教育者のアイデンティティとプロフェッショナルリズムの国際比較研究」

(1) 研究の背景と目的

担当者らは、過去3年にわたって科研「教科の指導法」を指導できる教師教育者の養成・成長に取り組んできた。本科研では、アクションリサーチを通して教師教育者に求められる資質・能力を育てる実践的研究を先行させることで、当面の課題解決を優先した。

しかし、教師教育者研究の先進地である欧州の研究者と交流する過程で、日本の教師教育者の資質・能力を高めたいならば、まず彼ら彼女らがどのようなアイデンティティを有し、どのようなプロフェッショナルリズムを欠いているかを実証的に把握した上で、それを補い向上させる方策を探索するべきではないか、との示唆を得た。またオランダとオーストリアの研究者より歴史教育を専門とする教師教育者の国際比較研究を行いたい、とのオファーをいただいた。本企画は、上のような欧州研究者との協働研究の成果を基盤にしている。

本研究の目的は、大きくは2つの次元に整理できる。

第1に、教師教育者に求められる資質・能力の解明である。日本・オランダ・オーストリアの教科教育を専門とする教師教育者が、①どのようなアイデンティティを抱き、どのようなプロフェッショナルリズムを磨いているか、②それにはどのような共通点と相違点が見られ、③とくに相違が生じるのはなぜか、について理論的・実証的に解明する。

第2に、教師教育者の資質・能力の育成方略の開発・提案である。教師教育者のアイデンティティとプロフェッショナルリズムの国際比較を踏まえて、(日本の社会的・政策的な文脈に定める)教師教育者の資質・能力を向上させるプログラムを開発する。最終的には国際比較の研究成果とエビデンスに基づいて、我が国の教職課程の質を高める条件ならびに教師教育者の養成・研修システムのあり方の提言をめざす。

(2) 研究の動向と計画

本分野を牽引してきた学術研究は、教師教育の理念や方法の研究が主であり、教師教育者の資質・能力に着目したものは少ない。

先行する理論研究では、コルトハーヘンの著書を訳した『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』(武田信子ほか、2010年)がある。しかし翻訳の大半は教師の育成論に割かれており、著者が提起する教師教育者の育成論は十分に引き出されていない。優れた実践研究では、大学院における教職課程担当者の育成実績をまとめた『「Ed.D」型教育学系大学院プログラムの開発と実践』(広島大学、2011年)がある。しかし理論的・実証的な裏付けが弱く、必ずしも本課題に応えるものではない。欧州では、*Becoming a Teacher Educator: Theory and Practice for Teacher Educators* (Swennen ほか、2009) や *The Professional Teacher Educator* (Lunenberg ほか、2014) など理論研究と実証研究を融合させた専門書が多数発刊されている。しかしこれらの研究は、いずれも教師教育者一般を議論の対象としており、数学科や社会科など特定の教科教育を専門とする教師教育者のアイデンティティやプロフェッショナルリズムの解明は立ち遅れている。

そこで本研究では、このような日欧の研究の芽生え的状况を受けて、以下の4点に挑戦する。

① 教師教育の方略研究を、教師教育者の資質・能力研究に発展させる。

- ② 教師教育者一般の研究を、教科教育を専門とする教師教育者の研究に拡張させる。
- ③ 各国の教師教育者が発揮している資質・能力を、国際共同研究を通じて比較分析する。
- ④ ①～③の成果を踏まえて、日本の教師教育者に内在する課題を指摘し、育成方略を提言する。

(草原和博*・岩田昌太郎・吉田成章)

IV 研究協議から見えてきた戦略—私の提言—

1. カリキュラムの開発

(1) 各教科—芸術（美術）—意義・本質の究明

「美術」では、次の二つを推奨したい。一つめは、生徒が自らの創造的かつ文化的な可能性に積極的にアプローチすること。二つめは、世界、国、地方、地域の多様な文化の境域を超えて、生徒が自由に、かつ深く美術について考え、その意義・本質を明らかにすることである。

これら二つによって本教科では、生徒は表現技法の修得を目指し造形作品の作り手としての習熟と同時に、問題解決と創造的思考における分析的な能力を培う。そして、探究、調査、振り返り、及び造形活動をとおして、自己を取り巻く世界の表現や美学の多様性を深く理解し、批判的な知識を身に付けた視覚芸術文化の創作者、鑑賞者となる。

(井戸川豊*)

(2) 国内外の先進的教育実践に関する情報の収集・分析

教育ビジョン研究センターの機能の一つとして、先進的な教育実践に関する情報を収集、分析し、必要とする教育関係者に提供していくことが考えられる。例えば、国際バカロレアに関する研究動向の把握、国内の学校における実践事例の収集、カリキュラムや教科書の分析から、今後の理科教育の充実、発展に向けて、科学の本質や国際的な視野を取り入れ学習内容を多面的に捉え直すこと、知識そのものについて認識を深めること、ICTなど情報ツールの活用スキルを高めること、対話的教育へ転換を図ること、などの必要性が見出された。

このような情報を教員の養成や研修の場面などで活用したり、地域の学校や関係機関へ提供したりすることで、今後の学校教育の改善に資することができると考えられる。

(三好美織*)

(3) 知識と学習および教育のあり方を体得する機会を現場との間でつくる

私が、国際バカロレア教育の中に見出すものの中心は、社会構成主義的な知識のとらえ方とその学習および教授のあり方である。母語の授業科目としての「文学」や「言語と文学」であれば、文学作品を丸ごとテキストとして読み通し、ディスカッションを通して分析と解釈を行い、批評文にまとめる。TOKであれば、知識とは何かという問いからはじめ、文化や科学、学問を探究する。国際バカロレアにおいては、こうした知識のとらえ方や学習および教授のあり方が具現化しているものと想定されるのである。

「主体的・対話的で深い学び」という考え方の背後にあるのも、本来こうした知識や学習・教授に対する考え方である。そうした学びを学習者において実現するためには、教師自身がそのような知識や学習に対する考え方を理解し、実際の学びを体得している必要がある。国際バカロレアという具体的な教育実践を通して、多くの教師がこうした考え方を

共有していくことが可能となる、このことが我が国において各県が国際バカロレア教育に取り組むことの最も大きな意義になると考えられる。

広島大学の役割の一つは、そうした知識と学習および教育のあり方について検討を行うとともに、それらを他の教師が理解し、体得する機会を現場との間で作ることにあるのではないだろうか。私自身は、公的な研修としてではなく、また、私的な研究会としてでもなく、いわば準フォーマルな形でこのことを行っている。広島県の高校国語科教師の自主的な組織である広島県教育研究会国語部会との協働による「国語科授業づくりセミナー」の開催である。公開授業を含めた年4回ほどの継続的な研修を2012年度以降5年ほど続ける中で、国語科の教科内容に沿った「主体的・対話的で深い学び」を実現する国語科授業のあり方を現場の先生方と探究してきた。他教科でもこうした研修を求める声があると聞く。こうした営みを全ての教科に広げることができないか。私からの提言である。

(間瀬茂夫*)

(4) 教育工学分野との連携した学習環境や学習材の研究・開発

構想中の「教育ビジョンセンター」は様々なニーズに対応し、多くの機能が実装されると考えられる。そのうちのひとつとして、学習環境や学習材に関する研究・開発が考えられる。その際、教育学研究科内の連携・協力を留まらず、他研究科と連携・協力することにより、一層の成果が期待できる。

例えば、最近注目されている拡張現実 (AR) や仮想現実 (VR) の活用やタブレット PC 用アプリの開発など、教育工学分野との連携・協力が考えられる。このような取組により、「新しい授業構想はあるが、コンテンツがない」「コンテンツはあるが、実際の授業で使うには不安がある」といった問題が解消され、よりよい学習環境や学習材の研究・開発につながると考える。

(木下博義*)

2. 教師および教師教育者の専門性開発

(1) 教科・領域・分野横断的組織の課題解決能力と創造性への期待

これまでの研究や教育実践の特徴として各教科の特有性を追求することに多く議論を費やしてきた傾向があるが、本研究プロジェクトを通して改めて、具体的課題に対して、研究者・学習者集団が個々の知見をいかした解決策を共有していくことの大切さを認識するに至った。現在、英語教育は大きな変革期を迎え、小学校へ教科としての英語導入への環境整備がされている。そこで抱える課題は、教師の資質、教材作成、カリキュラムマネジメントなど多岐にわたる。

教師の資質能力向上に向けては、単に英語力・指導技術向上という視点だけでなく、「継続的な教師資質向上への取組」も重要となってくる。教材作成については、これまでの経験的に作成されてきた中学校・高等学校の教材とは異なる、「発達段階を十分に考慮した内容や活動」が求められる。また授業時間の確保のためのカリキュラムマネジメントについては、「巨視的視点での対応」が必要である。こうした一つの学校の課題解決を図るために、本プロジェクトの豊かな経験や知見をもった研究者集団が、そのリソースを有効に活用していくための役割を担える。個々の専門性の融合が今後の諸課題解決につながるとともに、同じことを繰り返さないための効率の良い支援集団として活躍できると考えている。

(兼重 昇*)

(2) 教師教育の省察と「専門性開発」のための仕組みの開発

「教育ビジョン研究センター」の担う機能の一つに、教師や授業を総合的に考えるための「教師教育者の「専門性開発」プログラムの開発」があり、これを国語科の立場から考えると、国語教育学研究は国語科授業実践の改善にどのようにつながるのかという問題に取り組むことになる。2000年代半ばに米国の学校に導入された「リテラシー・コーチ」（教師と生徒の言語能力を改善するためにさまざまな企画や支援を行う職能）に関する研究は、むしろ通教科での「リテラシー」育成のための方策を検討するものであるが、教師教育者の専門性開発のために何が必要なのかということをお教える。

たとえば、Puigら（2006）が集約する教師の専門的力を形成するための「コーチング」のなかには、次のようなものがある。

- ・ 授業と生徒の学習を改善するためのワークショップやセッションの支援をする。
- ・ 授業省察後の授業改善のための手がかりを探るアクションリサーチの支援をする。
- ・ 授業観察を実施し、教師とカンファランスをしたり、感想を聞いたりする。
- ・ 授業と生徒の学習を改善するために、教師とともに教える。
- ・ 授業と生徒の学習を改善するために、観察授業（モデル授業）を提供する。

日本とは教育文化の異なる土壌のなかで提案されたことであり、また、既に日本の教師教育者が実践しているものも少なくない。既に実践されている「専門性開発」のアイデアを集約しつつ、教師教育実践の省察を行いながら、教師教育者が自らの「専門性開発」に取り組むためのアイデアを不断に提案し続け、教師教育者育成の仕組みをもつことは、「教育ビジョン研究センター」の重要な使命の一つであると考えられる。

（山元隆春*）

3. 研究方法論の再構築

(1) 研究者をつなぐ、知をつなぐ場をつくる

本共同研究で、将来ビジョンセンターで取り組むことができるであろうプロジェクトについて考える中で、数学、日本語、心理学、特別支援、そして初等教育という異なる専門分野の研究者が集まって「巧い教師」の本質探求を目指した研究に取り組むこととなった。その話し合いの過程において、数学者のしている数学の教室世界と言語教育の世界の違いを感じることもあったと同時に、指導者の役割やその発話が与える影響、知識が生まれ、深まる過程のあり方等、教科の枠を超えて語り合える事項も多くあることに改めて気付かされた。また、他領域の専門家が有するそれぞれの専門分野での知や事例を共有できることは、自分一人ではたどり着けない着想や結論に導いてくれる可能性を秘めていることを痛感した。このような共同プロジェクトの展開を可能にし、研究者をつなぎ、「知」をつなぎ、そして成果発信をもって社会へつながる場の提供という意味において、ビジョンセンターの役割の大きさを感じた。

（松宮奈賀子*）

(2) 多様化した教育現場を捉える複合的な観点

社会のグローバル化に伴い、教育現場における学びの形も多様化しつつある。例えば、公立学校における外国人児童・生徒数は年々増加しており、様々な言語的・文化的背景を持つ児童・生徒が「教室」という一つの空間で学ぶことが求められている。このような状

況に対応するためには、授業における教師と個々の児童・生徒および児童・生徒同士の間
にどのようなインタラクションが成立し、知識の創出と進化につながっているのかを詳細
に見取る必要がある。

そのためには、これまでの教科教育に関する知見に加え、談話分析や認知心理学、個を
見取るための臨床的な視点など、複合的な観点が必要になると考えられる。留学生が急増
している大学教育や今後増加する国際バカロレア校においても同様の問題が見られること
をふまえると、そのような複合的な観点にもとづく研究方法の確立が急務であると言える。
(永田良太*)

(3) 学習者の理解や学習過程の測定指標づくり

心理学が求められる教育への貢献としては、子どもの不適応や問題行動に関することが
多い。教員養成や教師教育においてもそれは同様であり、心理学が担う部門は主に生徒指
導や教育相談である。一方で、たとえば心理学が扱う知識理解のメカニズムに関しては、
現時点では残念ながら体系的に教育に取り込まれているとはいえない。また、本研究プ
ロジェクトに関わる中で、人間の行動、思考、感情などを測定するために心理学が開発し
てきた手法がツールとして有用であるという印象がより強くなった。

尺度構成一つとっても、適切な測定指標を作成するためには心理学の知見を用いること
ができ、実験法や生理指標といった測定手法も、学習者の理解や学習過程を測定するツ
ールとして利用価値があると考えられる。このように特に学習者が「どのように」理解し
ているかを明らかにしようとする場合に、心理学は現在より大きな貢献ができるはずである。
(森田愛子*)

4. 特別支援教育の観点

義務教育段階において、約 6.5%の学習上または行動上の困難のある可能性のある児童生
徒が通常の学級に在籍している(文部科学省, 2012) 状況を鑑みると、もはや特別支援教育
は「特別」ではない。Karten (2010) によると、こうした多様な子供のいるクラスでは、
学習が得意な子供から学習が困難な子供まで、個々の学力や技能レベルに適応した、複数
のカリキュラムを設定することが必要である。また、それぞれの子供の目標が連続線上に
並べられ、新しい学習課題が、それ以前の学習課題に続く形で設定されていれば、子供は
自ら学習の進捗状況と次にやるべき課題を確認しながら、自主的に学習することができる
ようになり、学習技能が育まれるにつれ、ほかの子供が本を読んだり、文章を書いたり、
研究したり、実験したり、算数/数学をしたりすることで得る喜びを理解し、いずれ自分
自身でもそれを経験し始める。

学習面に困難のある子供たちの環境整備をする上での重要な目標は、彼らが自立して学
習することができるように支援することである。例えば、車椅子の利用者がスロープのな
い建物に入ろうとしているが、その人がその建物の中に入る時や出る時には、車椅子ごと
体を誰かに持ち上げてもらわなければならない。しかし、もしその建物にスロープがあっ
たとしたら、車椅子の利用者は自力で建物に自由に出入りできるわけである。優れた環境
整備とは、車椅子用のスロープのようなものである。さらに、どのように環境整備を利用
するか、あるいはどこで適切な情報を得ることができるかを子供側が学習すれば、彼らは
必要なものを自らの力で探し出し、それらを使用することができるようになる。

特別支援教育の観点から貢献できることは、教科の特性を踏まえつつ、多様な子供たちが学びやすいような支援やカリキュラムの開発、学習しやすい環境整備の在り方を研究し、インクルーシブ教育システムの構築に寄与することである。

(川合紀宗*)

V 研究の成果と今後の課題

本年度の研究を通して、教育ビジョン研究センターがとるべき戦略が明確となった。また、これらの戦略を平成 29 年度のインキュベーションセンター申請の基盤とすることができた。

当初は、本共同研究プロジェクトの研究過程で提言された、①21 世紀に求められる資質・能力を育成する「カリキュラム」の開発、②教師・教師教育者の「専門性開発」プログラムの開発、③教師や授業を総合的に捉える「研究方法論」の開発、これらの開発研究を通して国内の課題解決や教育ビジョンづくりに貢献していくことを想定していた。しかし、これらの社会貢献をグローバルな活動にもつなげてほしいとの要請が寄せられた。そこで、①カリキュラムづくり、②教師教育者の専門性開発、③研究方法論の確立を通じた社会貢献の枠組みを、発展途上国に対する国際協力や政策提言にまで拡張して研究計画を立て直すことにした。

下には研究計画の概略を示した。来年度以降は、本計画を実現していく具体的な戦略を構想することが、本共同研究のミッションとなっていくだろう。

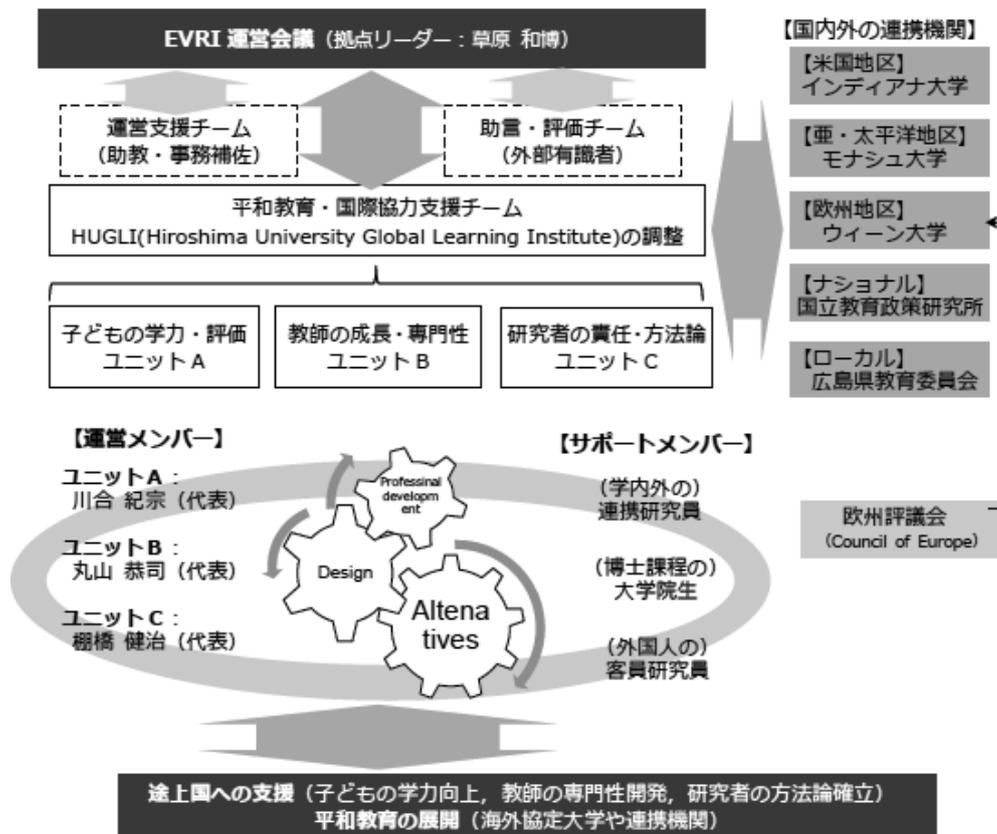


図1 教育ビジョン研究センターの構想図

(草原和博*)

引用文献

Karten, T. J. (2010) *Inclusion Strategies & Interventions*. Solution Tree, Bloomington, IN.

文部科学省 (2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf (2017年2月17日閲覧) .

Puig, Enrique A. & Froelich, Kathy S. (2006) *The Literacy Coach: Guiding in the Right Direction*. Pearson Allyn and Bacon.